

■学校教育専攻修士課程授業科目の概要

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
学校教育学特論	太郎良 信	現代における学校教育のありようを考えるための方法として、わが国の近代と現代における学校教育の変化に関して、それぞれの時代の教育課題に向き合った創造的な探求の諸事例を軸としながら検討していく。学校教育がそれ自体として完結性をもっていていると考えられていた時代の学校教育の姿を確認することによって、生涯学習社会における学校教育のあるべき姿を把握することを意図している。
教育社会学特論	金藤 ふゆ子	本講義では、教育に関する諸事象の中でも、特に子どもと学校、子どもと家庭・家族、子どもと地域社会に関する諸問題を取り上げ、その問題の背後にある要因を検討することを目的としている。ここではまず教育社会学の視座についてその歴史的経緯の理解を図り、その上で子ども期の社会化に焦点を当てながら、子どもと家庭・家族、子どもと学校、子どもと地域社会に関する内外の文献を講読し、現代の子ども達の社会的発達過程に生じている様々な問題の検討を行う。さらに近年の当該テーマに関する研究の動向を探り、研究内容の分析と共に研究方法や分析枠組みについて考察する。
教育心理学特論	池田 進一	まず、学力、読書教育、情報教育、コミュニケーション能力、絶対評価、テスト理論などに関して、最新の諸知見を修得する。そして、教師はその諸知見を利用して、児童・生徒における学びをどのように推進するかという意味での教授学的知識について検討する。とりわけ、児童・生徒の言語行動に関わる語彙能力、推理能力、記憶能力、要約能力、論理的思考能力、問題解決能力などの特性を検討することを通して、次期の学習指導要領から重視される「言葉の力」のあり方を追究する。
教育実践分析特論	吉田 正生	現代の教育の現場は、多様で複雑な問題を数多く抱えるようになっている。このような状況の中で、質の高い教育を創造的に実現していくためには、現状を正しく認識すること、現状を分析し原因を究明すること、その上に立って具体的な目標を設定すること、及び、その目標を実現する有効な方法を開発し実践することが必要である。 本特論は、授業を分析・創出する力の育成及び生徒指導力の育成を主眼とし、教育実践を次のような手法・視点によってとらえることを行う。 ・学習指導要領の構成と推移 ・エスノグラフィ 最終的な成果は教育実践の分析レポート及び「架空実践記録」というかたちでまとめる。
論文演習	池田 進一	大学院における研究では、研究分野が専門的になり、院生は初期の段階から、深い探究と洞察、論理性が要求される。本演習では、こうした点を踏まえて、課題意識の捉え方や、研究を進めるにあたっての資料の検索・参照・引用、各研究分野における手法の援用、研究計画の立て方、学会や研究会におけるプレゼンテーション、論文の構成・執筆など、研究における一連の流れを念頭に置き、受講者が各自の研究課題を明確化し、大学院生としての基礎的な研究能力、論文執筆・発表能力を伸ばす。さらに、各自の課題意識や研究計画を端的に伝えられるように発表・プレゼンテーションを実施し、意見交換によって、発展的な研究に繋げていけるように指導する。
学校経営学特論	葉養 正明	この科目は、学校教育の制度や実態などを総合的に理解できる力を培うことにねらいを置いている。履修者の学習ニーズなどを勘案しながら、かつ、学校教育の制度的構造、直面する諸問題などを事例研究的に取り上げ、レポート発表を基礎にしながら、協議、討論する形式で進める予定である。
教育実践分析実習Ⅰ	浅野 信彦 今田 晃一 永田 潤一郎 吉田 正生	越谷市立小中学校(受け入れ校)及び越谷市教育センターなどにおいて、実地に研究・実践を行う。 月ごとの共通課題について研究するとともに、自身の研究課題を明確にして実践研究にあたる。その上で、受け入れ校において、週1日を原則にして実践研究を行う。その際、受け入れ校の教員及び本学の教員から指導・助言を受ける。また、月に1回大学において実践研究の成果を交換し研究協議する。これらの取組を通して、実践分析の方法やフィールドワークの技法を学ぶとともに教師力や授業力等を身に付ける。また、学校組織の一員としてのあり方についても学ぶ。
教育実践分析実習Ⅱ	吉田 正生 今田 晃一 永田 潤一郎 浅野 信彦	「教育実践分析実習Ⅰ」に引き続き、越谷市立小中学校(受け入れ校)及び越谷市教育センターなどにおいて、実地での研究・実践を行う。さらに、実践分析実習Ⅱでは、実践研究終了後、越谷市教育委員会、受け入れ校、本学担当教員及び院生による「実践分析協議会」を行い、成果と課題について協議する。

よりよい授業を追求して

私は県立高校教員を定年退職した後、再任用として勤務してきました。現場での経験はそれなりにあるつもりですが、校務に追われて、じっくり考える時間が取れませんでした。もっと知りたいこと、納得のいくまで探求したいことがたくさんあります。そこで私は、現職教員入学選考制度を利用し、大学院で勉強しようと考えました。大学院では課題をレポートにまとめて発表、そして討論という形式の授業がほとんどです。先生方の専門性の高い講義や演習についていくのに四苦八苦ですが、充実感でいっぱいです。先生方や院生仲間のさまざまな見方は、とても刺激になります。今後もより良い授業を追求する実践者でありたいと思います。



教育学研究科 学校教育専攻修士課程2年
吉野 淳子 さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
生徒指導特論	高橋 克巳	生徒指導はアメリカで発達してきた「ガイダンス」の考え方に由来する。そこでこの「ガイダンス」の考え方について、その概略や歴史的展開等をそれぞれ概観した後、「キャリア教育」「ゼロトレランス」等、生徒指導に関わる近年のキーワードをいくつかとりあげて更に理解を深める。又、各種の教育活動の基盤として学級経営の充実が求められる、生徒指導において特にその重要性は高い。そこで後半では、学級経営に焦点を当てて、国際比較の視点や歴史的な視点から、日本の学級経営に関する研究知見を紹介する。その上で、今後の生徒指導や学級経営のあり方について考察を深めていく。
学校カウンセリング演習	井上 清子	学校におけるカウンセリングの必要性が指摘され、周知のこととなってきている。そして、学校におけるカウンセリングは、スクールカウンセラーのみに任せられるものではなく、児童・生徒と関わる教員が身につけるべきスキルの一つである。本演習では、学級経営、生徒指導、進路指導、教育相談、保護者面談など、学校現場での具体的な場面を設定してのロールプレイング（役割演技）や事例検討等を通して、児童・生徒、及び保護者や関係者の行動や心理を理解し、円滑な関係作りや援助を行うために必要な学校カウンセリングの理論と技術を修得し、実践力を身につけることを目的とする。
障害児教育特論	成田 奈緒子	特別支援教育の法制化の動きに伴い、すべての教員に、障害児に関する正確な知識とそれに基づいた個別支援教育方法の実践能力が求められることは必至である。本特論では、先天的な脳の発達障害である自閉症などを初めとする、児童・生徒に様々な障害を引き起こす疾患群の医学的な発症機転を、最新の研究成果の知見を交えながら学ぶ。たとえば、自閉症の場合には個々の児童・生徒の認知の欠落程度と種類を脳の機能分野と一致させて把握することで、児童・生徒個別の支援教育が具体的に計画できる。このように、疾患特注を念頭にいたオーダーメイドの障害児教育方法を研究し、実践に応用していくことを本特論の目標とする。
臨床心理学演習	井上 清子	児童・生徒の臨床心理学的問題が学校現場でみられることは希ではなく、教員は臨床心理学的知識をもち、児童・生徒を理解し、適切な支援や治療につなげることが必要とされている。本演習は、児童生徒の問題行動の基底にある心理や障害を正しく理解し援助につなげられる知識と技量を修得することを目的とする。学齢期に多い問題行動や精神障害について具体的な事例を提示し、その臨床心理学的理解や援助方法、日常生活での対応等について検討する。
教育評価演習	山森 光陽	この講義の目的は、児童生徒に対する学習支援となる査定（assessment）と評価（evaluation）を実現するための専門的な考え方と具体的な手法を身につけることである。最近の学習評価研究では適切なフィードバックを行うことが学力向上に大きな効果をもたらすことが明らかとなっていることを踏まえ、形式的評価に関する基本的な文献を購読したうえで、形式的評価や「学習者のための評価」と呼ばれる内外の実証的な先行研究を検討する。そのうえで、効果的な評価結果の戻しを実現する評価手法について議論する。
調査・統計法演習	中本 敬子	調査や実験などに基づいた研究を行うための基礎的なスキルを習得することを目的とする。まず、調査法、実験法、観察法、面接法などの技法の効用と限界について考察する。次に、研究仮説を立てた上で、それを検討するための研究デザイン、データ収集、分析、考察を実習形式で体験していく。その過程で、仮説検証のプロセス、記述統計・推測統計の基礎、考察の視点、研究結果の表現方法を学ぶ。さらに、ExcelやSPSSなどのソフトウェアを用いた分析方法についても演習し、実践的なスキルを身につける。
発達心理学演習	池田 進一	知覚、記憶、推理、言語、理解、思考、問題解決、創造性などの認知における発達に関し、学校、家庭、社会のそれぞれの担う教育機能の中で、統合されたシステムとしての人間の心がどのようにして成立するのかという問題を考察する。とりわけ、主に語用論（表現とその使用者との関係を研究する分野）にもとづいて、青年期までの読み、書き、話すといった言語行動の発達が、自己意識や対人意識などの情意における発達とどのように関連しているのかを重点的に検討する。

専門的で実践的な知識・技能の追及

私は高等学校の国語の教員を志しており、学部時代に比べてより専門的で実践的な教育に関する知識・技能を身に付けたいと考え、本大学院へ進学しました。

大学院の授業は、発表や討論が中心に展開されます。先生方や院生と議論することは、それまで自分が持ち得なかった新たな視点との出会いと、そこから教育を見つめ直し、追求することへと繋がります。

また、多くの先生方のご指導や準備室の方のサポート、院生室やパソコンの完備など、非常に恵まれた環境で過ごすことができます。このような環境で学べることに感謝し、今後も教育の研究に精進していきたいです。



教育学研究科 学校教育専攻修士課程1年
荒船 詩央里 さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
国語科教育法特論Ⅰ	山下 直	国語科の性格及びその教育法について、学部での学習をさらに深めて取り扱う。国語科で取り上げる学習内容とは何か、国語科ではどのような能力を育成するのかなど、国語科という教科の本質について考える。そのため、まず第一に、人間にとっての言語（外国語と異なる母国語）とはいかなるものであるかについて考える。次に、母語と母国語の違いを明らかにしつつ、母語の獲得と言語の習得の問題について考える。さらに、言語の能力が全ての教科を貫く基盤であると言われるにいたった理由および、国語科が全ての教科の中核であると言われることの意味を考察し、特論2の実践編への足がかりとする。
国語科教育法特論Ⅱ	山下 直	特論Ⅰの本質的な理論のもと、実際の教育法について考えていく。(知識及び技能)と(思考力・判断力・表現力等)のそれぞれの指導事項で示されている資質・能力を、国語科の学習指導でどのように身に付けさせるべきかを具体的に論じる。
社会科教育法特論Ⅰ	吉田 正生	本授業のねらいは、次の2つである。 1) 受講生の頭の中に社会科教育関連の地図を作る。 2) 自分なりの社会科論に基づいて学習指導案を書けるようにする。 上記のねらいを達成するための講義の内容は、およそ次のとおりである。 社会科と一口に言っても様々な考え方に基づいて社会科の授業実践が行われている。それを大きく3つの立場に分けて、それぞれの根本的主張を具現化するための授業構成・教材・主発問がどのようなものかを講述する。それと合わせて、学習指導要領の変遷についても述べていく。
社会科教育法特論Ⅱ	六本木 健志	この講義は社会科の中でも歴史分野に特化したものとする。 歴史教育は暗記だといわれている。しかし、そうした暗記的な歴史教育を改善するためにさまざまな提案・実践がなされている。 本講義はそうしたものを「歴史教育改善動向」とし、それにはどのようなものがあるのか・なぜそうした主張がなされているのかなどを、歴史学における研究改善動向と結びつけて講述する。
数学科教育法特論Ⅰ	永田 潤一郎	算数・数学科の授業で取り上げられる教材には、近代日本における百数十年の数学教育と、過去四千年に及ぶ数学の歴史において造り上げられてきた様々な思想やアイデアが凝縮され盛り込まれている。本特論においては、こうした歴史発生的な観点と児童生徒の認知発達の観点の双方から、算数・数学科の教材を立体的にとらえることを試みる。授業においては、内外の文献や先行研究に当たるとともに、学校現場における実践も踏まえながら、小・中・高の連携を視野に入れた教材の開発を目指す。
数学科教育法特論Ⅱ	白石 和夫	算数・数学教育の専門性を向上させるために基礎となる知識や技能を修得することをねらいとする。 日本の算数・数学教育には、なぜそのように指導するのかが謎といえる領域が存在する。その理由を追求することによって教材観を養っていききたい。また、数学は「科学の言葉」ともいわれるように一つの言語体系である。数学が言語であるといわれる理由について理解を深めていきたい。さらに、算数・数学教育改革の各国における取組み、算数・数学科指導の系統性、数理科学の諸分野と数学との関連などから、適切な内容を選択し、数学教育の意義と必要性について考察し、数学教育の今日的課題に対する理解を深める。
理科教育法特論Ⅰ	船山 智代	本特論では、小・中・高等学校における理科に関して、児童・生徒の自然科学の概念形成に適した教材、ならびに教材を用いた指導方法について検討し、自然科学の概念を理解する際に必要な要素について考察、抽出する。授業では、まず最初に参考資料として、現行の教科書等から具体例を選択し、教材と指導内容のあり方について分析し、教材の持つ役割や意義について考察する。続いて、教材と概念形成との関連について考察し、自然科学の概念形成に必要と考えられる要素を抽出する。これらの演習を通して、受講者の自然科学に対する理解を深め、独自で教材開発を行う力をつけることをねらいとしている。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
理科教育法特論Ⅱ	出井 雅彦	理科授業においては実験・観察が重要な要素を占めている。理科は物理学、化学、生物学、地学領域、及びその境界領域を含み、発展的学習においては領域を超えた結びつきの教材を利用することができる。本特論では、生物学関連の学習内容に絞り、児童・生徒の個性に合わせた発展的学習にも活用できる実験観察の教材開発を検討していく。又、実験指導において、児童・生徒の興味や関心を引き出す方法、目的とする学習内容への理解を達成させる方法など、目的意識をもった実験指導方法を検討する。
音楽科教育法特論Ⅰ	島崎 篤子	音楽科教育の目的・教材・方法等について、教材分析、文献研究、実践研究等を通して深める。特に音楽あそび・音楽づくりを中心とした文献講読や創作体験を行う中で、日本や世界の創造的な音楽教育の系譜・内容・現状を把握するとともに、21世紀における音楽教育のあり方と授業研究の方法を探求する。 ○音楽教育の目的論・教材論・方法論 ○M.シェーファーの音楽教育論・サウンドスケープ論 ○創造的音楽学習の系譜とJ.ペインターのプロジェクト体験 など
音楽科教育法特論Ⅱ	島崎 篤子	R.シュタイナーの教育思想を学ぶことによって、今後の学校教育および音楽教育の望ましいあり方を考える。またシュタイナーの音楽論やシュタイナー系の音楽療法に関連のある豎琴（ライアー）の演奏体験を通して、学校教育における音楽教育の役割と使命を追究する。 ○R.シュタイナーの音楽論・教育論 ○音楽療法や療法的音楽教育とライアー（豎琴） ○日本におけるライアーの導入の歴史と演奏法 など
美術科教育法特論Ⅰ	久保村 里正	美術科教育法特論Ⅰでは小学校、中学校、高等学校における、創造的美術教育の内容、意義について学ぶ。現行の学習指導要領では美術教育の内容を〔A 表現〕、〔B 鑑賞〕の2領域に分けており、更にその2つの領域を横断する共通の内容として、〔共通事項〕を設けている。この〔共通事項〕は、色・形・イメージといった基礎造形の範疇に含まれる内容となっているが、〔共通事項〕を単なる知的理解として切り離すのではなく、〔A 表現〕、〔B 鑑賞〕といった各領域の活動の中に位置づけ指導しなくてはならない。そこでこの授業では、知的理解に偏りがちな基礎造形の内容を、紙を中心とした材料体験を通して、知的側面と感覚的側面から理解をはかる。
美術科教育法特論Ⅱ	久保村 里正	現行の学習指導要領では美術教育の内容を〔A 表現〕、〔B 鑑賞〕の2領域に分けているが、その教科の活動は〔A 表現〕が大半を占めている。この〔A 表現〕の中には、絵画、彫刻、工芸、デザインといった各領域の活動が含まれているが、それぞれの領域に応じて、その表現に応じた指導が必要となる。そこで本講義では美術科教育法特論Ⅰで学んだ内容をふまえ、絵画、彫刻、工芸、デザインといった各領域の活動を通して、その内容、意義について学ぶ。
保健体育科教育法特論Ⅰ	加藤 純一	学習指導要領に盛り込まれた「言語活動の充実」について考えていく。体育、保健体育においては実技時間の確保と言語活動の充実を如何に両立させるかが問われる。その際に、動きを言語に置き換える作業と、動きの核となるもの、つまりコアな動きの抽出が求められる。そこで、これらを文部科学省の指針や事例、指導書等を参考にしながら探り、体育授業における言語活動が如何にして成立していくのかを読み解いていく。
保健体育科教育法特論Ⅱ	加藤 純一	「保健体育科教育法特論Ⅰ」に続き、学習指導要領に盛り込まれた「言語活動の充実」について考えていく。本講義では、思考・判断を促す動きづくり、示範の仕方工夫、動きの情報化について取り上げる。指導の場面では言語活動の充実を図るべく、種々の取り組みがなされているが、具体的には上述のような教師側の働きかけがあってこそ成り立つと考えられる。こういった取り組みの効果について公開授業の映像等を用いながら考察を深めていく。
家庭科教育法特論Ⅰ	石井 智恵美	家庭科教育は人間の生活の基盤である家庭生活の意義を理解し、発達段階に応じた学習を通して家庭生活の充実と向上を目指すものであり、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てることを目標とする。そのためには、家庭科の果たすべき役割やねらいの理解、日常生活に必要な基礎的な知識や技能を身につけるための学習の工夫と分析、学習指導の展開の中に実際の生活を意図的に取り込む学習の工夫と分析、学習の成果を積極的に生活に生かすことを支援する学習の工夫と分析、家庭生活における身近な課題解決能力を育てる学習の工夫と分析、家庭や地域社会と連携を図る学習の工夫と分析、家庭科の多岐にわたる内容を、相互に関連させ、総合的に展開する工夫と分析等を通して「家庭科」についての理解を深め、生活実態に則した家庭科教育のあり方を追及する。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
家庭科教育法特論Ⅱ	石井 智恵美	家庭科教育は人間の生活の基盤である家庭生活の意義を理解し、発達段階に応じた学習を通して家庭生活の充実と向上を目指すものであり、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てることを目標とする。そこで、アメリカ合衆国の初等・中等の家庭科および家庭科関連の教科書指導書をもとに、アメリカにおける家庭科・家庭科関連教科教育の現状の把握、教科書の記述内容とその指導法についての検討、指導書に示される教材とその使用方法の検討、教科書・指導書の構成の検討等をする。更に、日本の家庭科教科書との比較検討、日本の教科書にはない題材および教材のバックグラウンドの検討等を通して教育内容や指導法の動向を探り、日本の家庭科の新たな指導法の模索につなげる。
生活科教育法特論	平野 朝久	生活科は平成元年に低学年に新設された教科であるが、たんに新しい教科ができただけでなく、それまでない新たな基本原理(理念)や子ども観、授業観に基づいている。しかし、今やそうした認識が薄らぎつつある。そこで、これまでの優れた実践事例の分析を通してその実践を生み出し、支えているものを明らかにし、生活科教育の本質を踏まえた実践、指導ができるようにする。
英語科教育法特論	小嶋 英夫	教育における「教え中心」から「学び中心」へのパラダイム・シフト、これからの時代を生きる人々に求められる資質・能力、言語教育の世界的動向などを踏まえ、小・中・高を通じた一貫性のある英語教育のあり方について、理論・実践・研究の3領域を統合する視座から学び合う。国内外からの文献・資料をクリティカルに読み、協議を通して理解を深め、教室での指導者に期待される専門的資質・能力と実践的指導力を主体的に身につけるように支援する。また、省察的実践者・研究者になることを奨励し、専門的な学びと成長を促すように配慮する。
道徳科教育法特論	豊泉 清浩	道徳科は、学校教育全体で行う道徳教育の要として、道徳的価値の理解を基に、自己の生き方についての考えを深めることを目標としている。道徳科と各教科、特別活動、生徒指導等との関係を理解する。道徳科で考える自己の生き方について、教育哲学の観点から理解を深める。読み物資料の検討による授業の構想や模擬授業を通して、道徳的実践意欲と態度を育成するための指導方法を修得する。
教育課題特論Ⅰ	今田 晃一	小・中学校の新学習指導要領が、平成29年3月31日付官報に告示された。ここでは、アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)の視点、からの授業改善・授業づくりの重要性が改めて示された。アクティブ・ラーニングは、ICT活用、特にタブレット端末(iPad)の在り方について実践事例、実習を通して検討する。また、新たな課題となった小学校におけるプログラミング教育の必修化についても「Scratch」を体験的に学び、その可能性を考察する。
国際理解教育特論 ※2017年度入学生からは「教育課題特論Ⅱ」に授業科目名称変更	手嶋 將博	文部科学省では国際化に対応するわが国の教育目標として、異文化理解・受容と共生の態度、自国文化理解に根ざした自己の確立、自らの考えの発信を含めたコミュニケーション能力の育成を挙げている。本特論では、こうした諸能力の育成に関する理論・実践の検討を中心に、多文化共生状況にある東南アジアをはじめとした諸外国における異文化理解教育や自己の伝統文化理解とアイデンティティ確立、母語・外国語教育の現状と課題について、日本との国際比較的な視点から分析・考察を行う。さらに、多文化共生社会におけるシチズンシップ教育や、国際理解教育のより高次元目標である「地球市民意識の涵養」を目指すグローバル教育についても言及する。
環境教育特論 ※2017年度入学生からは「教育課題特論Ⅲ」に授業科目名称変更	山縣 朋彦	本特論では、宇宙環境を次のような観点から考察していく。第1は、日常とかけ離れた極限環境としての宇宙空間を理解していくものである。特に銀河系・銀河、宇宙空間における環境効果について、物理学的・幾何学的な特徴を考察する。第2は、生命存在の条件を通して、生命体にとっての宇宙環境を考えていく観点である。第3は、人類の宇宙開発や宇宙探査に伴う太陽系環境への影響と、その捉え方について考察していく観点である。第4の観点は、地球自身を宇宙環境の一要素としてみなし、地球環境について考察を加えていくものである。